

# シベリア日食紀行 in ティンダ

孫 隆二

今回の日食のツアー選びについては、95のインド日食終了後に、インドではツアーが組めなかったコスモトラベルが、チタより多少条件のよいシルカツターの募集を開始されましたが、宿泊所がまともでなく（サナトリウム利用）不安でした。その後、なぜか低温ということが強調されすぎて、モンゴルのツアーが大半でした。私は、人間にとっての条件が多少厳しくとも、純粹に日食の条件のよいところを選びたいので、（今回は、ダルハンよりも太陽高度が倍違うことに注目）PTSからティンダという掘り出しものツアー設定して頂きましたので、即申し込みをしました。PTSさんにはすでにインドでお世話になっていい印象もありました。

今回は、前2回のときより、ロシアというお国がらか、PTSからの情報が不足していた気がします。

PTSのティンダコースは定員35名でしたが、ドタキャンがあり、最終的には添乗員1名を含めて26名でした。これぐらいが、動きやすく快適な人数ですね。ただ、あとから便乗してきた協栄ティンダコースの38名に比べると、人ごとながら、採算という面で心配ですが、25名のメンバーは、年齢も七十何才から小学生とバラエティに富み、若い男性が多数です。関東の方が多ですが、関西からも2名また、愛知県からも私を含め仲間とで4名、名古屋市の科学館の方が4名、行き返りの飛行機が一緒になりました。

予想以上に暖かい雨の新潟（気温は15度以上）でおいしい魚とお酒で前祝いをして集合時間1時半に空港に戻ると、日食ツアー（協栄ティンダ、チタ、シルカ組）の人たちでごった返していました。総勢100名弱ぐらいでした。

予想に反して、ほぼ定刻通り満席状態でアエフロード（ツボレフ 164人乗り）は離陸しました。機内は、おせいじにも快適というには程遠く、田舎のオンボロバス以下のイスで狭く、う〜ん面白いことに前後にボタンたおれ、たいらになる。しかし安定せず、食事をするのに大変。何も無い日本海上空を一直線に飛び、一時間半程で、ロシア沿海州の雪をかぶった急峻な峰が見てきました。その後高度を下げ、何も無い白い雪原の上を飛び、2時間ほどでややあっけなくハバロフスク（以下ハバロと略す）空港上空に到達するが、大きく飛び越して、（ロシアでは有視界飛行のため必ず一度飛び越します。）れれれと思わせながら、無事着陸する。外温は、なんといきなりマイナス17度、吐く息が真っ白、慌てて着込む。う〜ん日本海を越えただけなのに、温度差30度以上に、シベリアをまさに実感する。空港は閑散としていましたが、飛行機自体はたくさん止まっていました。アエロ機は尾翼が特徴的で格好いいですね。入国にやや手間取り、ハバローのインツリストホテルに向かいました。ホテルで、ロシアの可愛い少女たちの歓迎のダンスに感激する。パンをちぎって食べさせてくれる。ロシアの若い女性は美人率が非常に高く、3人に一人は、美人。それも大柄でなく、スタイルもよい。ただ年を取ると、…。私たちの部屋は西を向いており、アムール河の凍った氷原がはば2Kmに広がって見えます。ただ、凍っているの、どこが河か陸がよくわからない状態。部屋にいても大陸を実感できます。部屋はヒー

ターもあり、TVもあり、NHKの日本の放送も何とか見られます。お湯は出ましたが、バスタブはありませんでした。が、そこそこのレベルでした。夕食は、機内食から時間がたっておらず、バンドも入りダンスもできるレストランでした。割合軽目の食事でした。サラダと水ぎょうざ現地の人たちの社交の場という感じで、異国情緒、ムードは満点でした。

次の朝は、機材のテストの兼ねて5時に起き、HB彗星を見に河原に行きました。気温は予想通り、マイナス25度、ビデオは大丈夫でした。HB彗星は町の中ながら明るく、尾も10度ちかく見えており、これなら皆既中も見えると確信しました。ティンダへは冬期は定期便がなく、アントーノフ36人乗りチャーター便で向かう。プロペラ機でひたすら、雪原の上を3時間ちかく飛ぶ。とにかくだっぴろいことこの上なし。好き勝手に蛇行する原始河川、ダイナミックな構造山嶺。地理学徒の私にとっては、見ていて飽きない、まさにシベリアを上空から満喫しました。このフライトだけでも、旅行代金の価値がありました。3時間飛んでも、まだまだシベリアの入り口なんですよ。地球はまだまだ広い！！それと、機内1時間ばかりは寒くて暖房が入ってないと思っていたら、その後今度は暑くなりすぎて、体温調整が大変でした。機内でも食事が出ましたが、すっかり冷えていました。鶏のもも焼き、ポリューム一杯のえびの塩ゆで（多分北海道のホッカイシマエビ系）が最高においしく、なお、通のためにミソも味わえるようにしてある感激！！これでビールがあればいいことなしだったので、（帰りの新潟便にも出ました、ビールもバッチリ）ほとんどひとけのない地上でしたが、ようやく町が見え、飛び越して、飛行場に無事付きました。

飛行場の周りの木々は大森林、というにはあまりにも細いマッチ棒のような木々でした。カラマツ系でしたが、栄養が不足なのか太くなる前に枯れてしまうようです。ティンダは第二シベリア鉄道建設のために作られた町で、そのために若い人がモスクワから移住してきており、人口6万人で中層アパートが立ち並ぶ活気が感じられる町でした。

飛行場から直ちに観測地の下見にでかけました。まず町を見おろす南の丘は木立等があり、没。はしごでのぼるホテルの屋上も強度的に危険と没。あと遊園地や凍ったティンダ川の河原は、南に発電所があり、常時煙突から煙が出ておりかなり問題。結局、交渉の結果1番条件のよい飛行場で、それも避難部屋付きでやれることになりました。1台しかないバスも押さえて頂きました。

町で唯一の外国人用ユーノストホテルは予想以上に快適で、私たちの部屋はハバロより広く、オイルヒーターもあり、浅いながらバスタブもありました。食事もハバロよりおいしかったです。ウォッカ入りではないかと思える10度もあるビール（オランダ産）を飲んで、早目に、高い北極星（55度）の見える部屋で眠りました。

日食当日も、当然のごとく5時起床で、マイナス35度の中HB彗星撮影のため、近くの公園に行く。思ったより街灯があり明るいですが、何しろ極寒なので、近所で我慢しました。それでも一時間が限界ですね。ホテルに戻り、朝食を済ませ、機材をある程度組み立てバスに乗り込む。日出時は少し雲があったが、飛行場に行くまでには消え、ほぼ快晴となる。気温マイナス20度程度とますます。なにより風がほとんどないのがうれしい。

広い通路上（舗装）に思い思いにセッティングしていると、協栄ツアーの半分ぐらいの人が、どこから捜してきたのか超オンボロバスでやって来た。（彼等は別料金だったらしい）広角で地

上風景ごと狙う私にはあまり有難くなかったが。

準備する時間はたっぷりあるはずなのに、私はチョンボの連続である。

今回の観測項目は 1.ペンタ67 55mmによるコロナとHB彗星 2.デジタルビデオ ソニー VX1000による撮影2×テレコン 3. Hi8のよる情景ビデオ（オートパン無人君作戦）

結果は1. は手違いで構図が向かずに没。赤緯軸に干渉。 3. テープが低温のため張り付いたようで撮影不可能。 2.はなんとか満足のいくものが得られました。今回はシャードバンドが3分前から、かなりはっきり見られたようです。残念ながら、私は、1. を 3.の三脚に変更するのに必死で、しかしネジまわし、コインもなくできませんでした。今回も皆既中はそんなに暗くなりませんでした。しかしHB彗星は、尾までしっかり見ることができました。朝と夕方ハバロで見ましたので、一日に3回HB彗星を見るという貴重な体験ができ満足しています。コロナ自体は、予想通りの極小期の東西形のひかえめなコロナでした。プロミネンス自体も派手なものはありませんでしたが、高緯度の為なのかコロナの周りがオレンジががっていたのが印象的でした。それと本影錐の移動が非常にはっきりわかりました。メキシコ、インドのときは気が付きませんでした。一応死んだ67でピンボケながら撮影しました。今回唯一のステールですが。皆既中はさすがにマイナス28度まで下がったようです。そのせいでかなりの方がトラブルに見舞われたようですが、モンゴルはほぼ全滅、チタは雲が出たようで、そんな中ティンダは快晴という最高の条件で見られたことを感謝せずにはいられません。

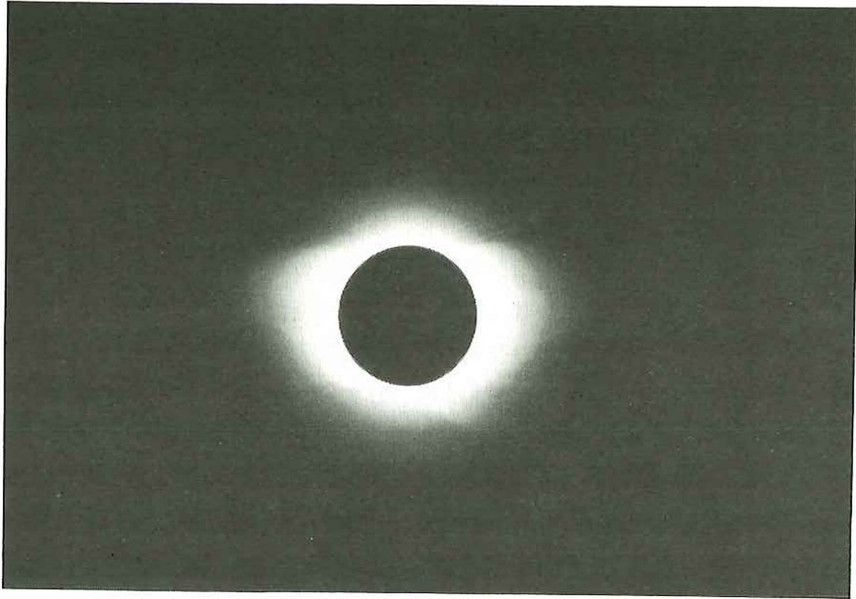
やはり今回は、温度より高度の選択がよかったのだと思います。こんなに快適なら宿題の多重露出も可能でしたね。 ということで今回も快晴3連勝で日食階級はもちろん4でした。

地元の人たちがどう日食を見ていたか、離れていたのでよく分かりませんが、伝聞ですが、サングラスを用意していた人もいた様ですから、そこそこ見られたと思います。そういえば、ブラウザ新聞社の取材があり我々の代表の方が、インタビューを受けていました。地元のTVカメラも取材していました。

日食観測成功の余韻にひたりかったのですが、飛行機の都合でホテルに戻り、1時間程で荷造り、食事を済ますことになりました。私は夢にまで荷造りがでてくる程荷造り下手で、食事を放棄して、ようやく集合15分前に完了。そうしたら私にも食事が準備され、その前にビールが飲みたかったのですが、品切れということで、ウォツカを150g（なぜかccでなくgでいう）すすめられ、私だけアルコールを頂く。とにかくストレートはきつい。その上現地のガイドさんに多分貴重品のコニャックを奢って頂いてしまう。逆に私が奢ってあげないといけなかった気がしますが。とにかくスパシーバ!!! 日食が見られた満足感とアルコールで気分は最高でした。その後ハバロに戻り一泊し、帰国便搭乗の際、たいしてお土産買う物もないので行きも帰りも荷物重量変わらないのに、行きでは何もいわなかったアエロフロートにしっかり重量オーバーということで、一人あたり20ドル取られたのはいかにもロシアというところでしょうか。

でも、ティンダの氷点下20度の中、凍った川べりで家族で野外パーティーをしている姿に、こんな厳しい環境のなかでのたくましい人間の姿に感動を禁じ得ませんでした。そして、厳しい自然の中生きているせいか、ロシアの男性の平均寿命が59歳と聞いて少し感傷的な気分になっ

てしまいました。でもシベリアは予想外によいところで、ロシア人もとてもよい人たちでした。



写真データ：ニコンFM10、トキナーSL400SD (f = 400mm) F5.6 + ニコンTC-14A  
1.4Xテレコン (f = 600mm、F8)、コダックダイナ100 (ISO100) 2倍増感  
1997年3月9日10時13分58秒、露出1/4秒、  
気温 -24℃、ロシア・ティンダ飛行場、撮影：福岡英二氏



PTSティンダツアー集合写真 (ロシア・ティンダ飛行場にて)